

## ドキュメンタリー映画『抱擁』

中山 秀一

『抱擁』というドキュメンタリーを、マスコミ試写で観る機会があったので紹介したい。なおこの作品は、昨年の第27回東京国際映画祭の「日本映画スプラッシュ部門」で、10月25日に公式上映されている。

老いた母親が、ともに苦勞した夫の最期を看取ってから4年間の生きざまを、ドキュメンタリーのディレクターである実の息子が、親子ならではの距離感で、克明に密着取材した映画である。

そのディレクターは、テレビのドキュメンタリーで200本もの制作実績を持つ坂口香津美氏である。この作品は、坂口ディレクター自身がカメラを持って撮影しており、その期間は2009年2月から4年間にわたっている。

筆者も、母が93歳で逝くまでの約5年間にわたり、兄弟3人が交代で実家に泊まり込み、介護を続けた経験があるので、これは共感できる部分がまことに多い映画であった。

映画は、東京の団地の部屋で、母親が布団に横たわり、妹のまり子に電話をしながら精神が錯乱して、パニック状態になっているところから始まる。

この母を撮影している監督は、カメラを覗いて撮りながら、画面のオフから母親に応酬している。母親は受話器を持って、「香津美は私の面倒を見ないで蹴ったり叩いたりするよ、このまま死にたくないよ!」などと被害妄想的な言葉で、まり子に訴えている。当然、監督は「そんなことするわけないよ!」と言い返しながらカメラを回し続けている。

この場面は、母が夫を亡くしてから最悪の精神状態の時期のようで、この映画を象徴するシーンとしてタイトル前に見せている。すでに母は認知症も出ておらしく、言っていることが子供じみて、見ていて悲惨さを感じさせないのが救いでもある。

この母親坂口すちえは、1930年鹿児島県種子島の農家に生まれ、第二次大戦の戦前・戦中・戦後を経て、高度経済成長期に上京し、夫婦で肉体労働をしながら家族を養い生きてきた。そしてようやく穏やかな年金生活を楽しむ時になって間もなく、夫との死別があり、冒頭のような精神状態になった。

夫の病室を訪ねて、彼女は懸命に声をかけるが、すでに夫は酸素のチューブを鼻に入れ、口を開けて呼吸



『抱擁』

© SUPERSAURUS

2014年 / 93分 / 16:9 / カラー / 日本

製作・配給 スーパーサウルス

4月下旬 シアター・イメージフォーラム 以降、鹿児島ガーデンズシネマ、大阪シネ・ヌーヴォほか全国順次ロードショー

をする、典型的な末期状態である。しかしカメラは、その口を開けた父親の顔を、冷静にアップサイズで撮影している。ここでは、日本の末期医療のありかたなどが、観る者に迫るはずだ。

夫を亡くした母は、精神安定剤を手放せないほどの状態になり、「薬はどこだ!」が口癖のような日々を過ごしている。

しかし、訪問看護の女性が来たときなど、精神の状態がよい時には、まるで別人のように爽やかな表情になる。医院に行って先生の間診を受けるときなどは、しっかりとしたよそ行きの口調で答えるのが愉快だ。また、美容院で髪形を整えてもらう時にも、あのパニックがウソのような楽しそうな表情で、可愛さすら感じさせる。女性はいくら歳をとっても美容院に行くのは楽しいのだ。筆者の母も孫に髪をいじってもらう時には実に嬉しそうだった。普段、あそこが痛いここが痛いとかぼしていたのがウソのようである。

しかし、このまま東京の団地で母が一人で住むのは、介護にも無理なので、故郷種子島に住む妹まり子が母を呼び寄せることになった。いよいよ引っ越し日が来ると、長く共に生活してきた思い出の家具など身の回り品が、無造作に業者によって処分されると、一抹の寂しさを感じさせる。

すちえは、緑豊かで環境の良い場所にある妹まりこの家の庭の一角を借りて、小さな新築の家を建てる。要介護に必要な自身の持てる金をはたいて、息子も認めた上での決断だった。

故郷種子島で、美しい海岸を散歩する老姉妹の様子や、おやつを食べながら楽しそうに会話弾む二人の

姿は、見る者に安ど感を与える。

まり子の家に来てから、入浴のシーンがいくつか出てくる。母の胸には、スルメイカのようになった大きなおっぱいが貼りついて、昔をしのばせる。カメラマンが息子なので、抵抗なく密着撮影が出来るのだろう、妹と一緒に湯船に浸かる老姉妹は心から楽しそう、母の精神状態も癒されていくようだ。やはり日本人にとって、故郷は心を癒してくれるところだ。

映画には、折に触れて、昔の若かった時の家族の写真が、カットバックで効果的に挿入され、美しい思い出として、見る者にも印象深く心に残る。

最後の映像には、故郷に戻った母が、心の健康を取り戻して、生きる希望を感じているような表情が見えて、余韻を残しながら映画の終了となる。

なお、この映画にはナレーションの類が一切出てこない。すべては画面に登場する人たちの会話で進行する。したがって、ナレーションによる誘導とか押しつけがないから、見る者の境遇経験によって、様々な解釈が出来る点が優れていると思う。

## 第27回(2015年) すかがわ国際短編映画祭 5月9日(土)～10日(日)に開催

今年で27回を数える「すかがわ国際短編映画祭」は、5月9日(土)、10(日)の両日、例年通り須賀川市文化センターで開催される。

上映作品は国内17、海外14、計31作品となり、今年も大ホールのみでの上映となる。

今回はゲストとして「灯り続けた街のあかり～みちのくの医師の信念～」を制作された瀬川徹夫氏とそのみちのくの医師である後藤康文氏が参加の予定。

### 【上映作品】

#### 5月9日(土) 10:00～

彦一とんちばなし(学研) アニメ 18分  
字のないハガキ(学研) アニメ 18分  
Me and My Moulton(カナダ) 14分  
Sissy(ノルウェイ) 13分  
Meat Ball(スウェーデン) 5分  
Just a little(スウェーデン) 9分  
Decorations(宮沢真理) 7分  
Video Store(ポルトガル) 17分  
夕化粧(胡ゆえんゆえん) アニメ 10分

#### 13:00～

灯り続けた街の明かり～みちのくの医師の信念～(永井プロジェクト/シネバザール) 45分

〈ゲストトーク〉

Tomorrow(ポーランド) 14分

Helium(デンマーク) 23分

平成25年度工芸記録映画 細川紙(グループ現代) 39分

生命の誕生～絶命危惧種日本メダカの発生(豊岡定夫/豊岡興志子) 13分

桑基魚塘 クワとサカナのものがたり(中日文化研究所/重森貝崙) 28分

#### 5月10日(日) 10:00～

悩まずアタック! 一脱・いじめのスパイラルー(映学社) 33分

ズッコケ三人組の火あそび防止大作戦(映学社/リパティアアニメーションスタジオ) アニメ 11分

Lambs(ニュージーランド) 15分

5 METERS 80(フランス) アニメ 5分

Reflection(イスラエル) 5分

Eugenia(イスラエル) 14分

原発の町を追われて 避難民・双葉町の記録(堀切さとみ) 30分

#### 13:00～

「ただいま」～の声を聞くために(あさがおの会/協映) 33分

鬼来迎(ポーラ伝統文化振興財団/桜映画社) 38分

名塩雁皮紙～谷野剛惟のわざ(毎日映画社/文化庁) 30分

You will find me(アルゼンチン/イタリア) 15分

No time for toes(フィンランド) アニメ 8分

Choir Tour(ラトビア) アニメ 5分

写真館(スタジオコロリド) アニメ 17分

すばる望遠鏡 世界最大の補正光学系開発(イメージサイエンス) 13分

柿右衛門ーにごしで(記録映画社) 30分

〈上映作品・上映順は変更される場合があります〉

撮影部会と同映画祭東京実行委員会は、例年通り本映画祭への団体参加を行います。参加費は宿泊費(夕・朝食付)込みで14,000円。

〈映画祭ホームページ <http://sisff.littlestar.jp/>〉